多面的感情状態尺度の作成

川崎医療福祉大学 寺 崎 正 治¹

近 畿 大 学 岸 本 陽 一

関西医科大学 古 賀 愛 人

Construction of a multiple mood scale

Masaharu Terasaki (*Kawasaki University of Medical Welfare, Kurashiki, Okayama 701-01*), Youichi Kishimoto (*Kinki University, Higashiosaka, Osaka 577*) and Aito Koga (*Kansai Medical University, Hirakata, Osaka 573*)

A self-report instrument to measure multiple mood states was constructed. Six hundred and forty-eight Japanese affect adjectives were collected and divided into two lists. Japanese undergraduates totaling 1 254 rated each adjective in the list on a 4-point intensity scale to assess their momentary mood states. Factor analyses revealed 131 items with high loading on extracted major factors. The new list of these 131 items was rated three times by undergraduates totaling 1 768 and was factor analysed. Throughout the factor analyses, eight factors emerged with consistent reliability. Finally, 80 items highly loaded on these factors were selected to construct eight 10-item mood scales. These scales were called Depression (Anxiety), Hostility, Boredom, Liveliness, Well Being, Friendliness, Concentration and Startle. The scales were shown to be internally consistent. A comparison of these scales with the English mood scales was presented.

Key words: mood scale, mood state, structure of mood, factor analysis, Japanese student.

古くから感情の種類や感情の基本的次元を探索しようとする様々な試みが行われてきたが、感情の主観的な経験に基づいてこれを行なおうとしたのは、Nowlis & Nowlis (1956) によってであった。彼らは形容詞やそれに類する言葉を用いて感情の主観的な状態を測定しようと試みた。例えば、“angry”のような言葉を提示し、そのような感情をどの程度感じているかを被験者に評定させた。後に、彼らはこれらの言葉に対する被験者の評定結果を基に因子分析を行ない、10の感情因子を見いだした (Nowlis, 1965)。そして、この因子分析の結果に基づいて、これらの感情強度を測定するための質問紙である気分形容詞チェック表 (Mood Adjective Check List: MACL) を作成した。

Nowlis 等の先駆的な研究を契機にして、感情の主観的な状態を研究しようとする試みが多くの心理学者達によって行なわれるようになった。このような分析を通して、感情の構造が明らかになるとともに、感情の状態を測定するための様々な尺度が作られ、多くの分野で応用されつつある。ところが、このような試みは欧米におい

ては盛んであるが、日本では少数の例外を除けば、ほとんど研究がなされていない。確かに不安のような単一の感情状態を測定するための尺度は存在するが、複数の感情の状態を同時に測定するための客観的な尺度は作られていない。本研究においては、このような事情を考え、単に感情の構造に関する基礎的な研究にとどまらず、多面的な感情の状態を測定するための尺度を構成することを目的とした。

Howarth & Schokman-Gates (1981) は、現存する代表的な自己報告式の多面的な感情状態尺度について概観を行なっているが、そこで取り上げられている11の質問紙は、短いものでは20項目、長いものでは140項目前後のリストからなり、また、そこで取り上げられている尺度は2から13尺度と多様である。これらは、全て感情状態に関する尺度であるとはいえるものの、あるものは特殊な用途を意識して作られており、全ての感情を網羅しているとは限らない。さらに、これらの多くは因子分析的な方法によって尺度が作成されているが、抽出する因子の数をいくつにするかによってもその数は異なってくる。また、Watson, Clark, & Tellegen (1988) によって最近作成された PANAS にみられるように、高度に抽象化された感情の基本的な2次元である肯定的感

¹ 本論文を作成するに際し、貴重な御助言を頂きました関西学院大学、今田寛教授に感謝いたします。

情、否定的感情を測定しようとするものも存在する。基本的な感情状態がいくつあるかという問題は、ちょうど基本的なパーソナリティ次元がいくつかという問題と極めてよく似ている。すなわち、パーソナリティを記述するときどの程度の抽象化の水準を用いるかによって、基本的な特性の数が異なってくるのと同様に、感情状態を記述するときにおいても、そこでとる抽象化の水準によって基本的な感情の数は異なってくるであろう。故に、どの質問紙が正しくて、どれが誤りであるとは一概に言えず、用途や目的に応じて最適な抽象化の水準を取るべきなのである。

本研究においては、日本語形容詞もしくはそれに類似した言葉を用いて、感情の主観的状态を測定することを目的とする。当面は、出来るだけ多くの、同定可能で再現性の高い因子を含んだ感情状態尺度を作成することを目標にした。なお、本研究は4つの調査から成り立っている。まず、調査1と調査2において主観的感情状態に関する主要な因子を同定した。さらに調査3では評定形式の問題を取り上げ、感情状態尺度作成のための基礎資料を整えた。そして調査4において、以上の結果をふまえて多面的感情状態尺度を作成し、その信頼性と因子の妥当性について検討した。

感情状態を表す言葉の収集と予備調査

すでに、述べたように欧米の研究者達は感情状態を測定するための様々な尺度を開発している。本研究では特定の質問紙をモデルにするものではないが、そこで用いられてきた多くの英語の言葉を1つの手がかりとした。英語の形容詞は、Borgatta (1961), McNaire & Lorr (1964), Lebo (1978), Lorr & Shea (1979), Zuckerman, Lubin, & Rinck (1983), Watson, Clark, & Tellegen (1984), Watson & Tellegen (1985), Thayer (1986), Gotlib & Meyer (1986) から収集した。これらの資料から得られた言葉は260語であり、これらの言葉に対して可能な限りの日本語訳を行なった。その結果、1365語が得られ、この中から重複する語を省き、さらに意味内容がほぼ同じと考えられる語を統一すると447語の感情状態表現語が得られた。

次に、これらの手続きとは独立に、感情状態を表す日本語を分類語彙表(国立国語研究所, 1984)から選んだ。主に、“精神および行為”のカテゴリーに含まれる言葉で、相の類に分類されているものの中から選択した。その結果、427語が得られた。

以上、2つの手続きによって収集した合計874語から、重複語を削除し、最終的に761語の感情状態表現語が得られた。

次に、これらの761語について、これらの言葉で表される状態が我々の日常生活の中でどれだけの頻度で経験されるかを調査した。その際に50音順に並んだ単語の

リストを便宜上、4つに分割し、各々を異なる4群の男女大学生の被験者、各293名、267名、234名、260名に評定を求めた。その結果、“どのような感情を表しているのかよくわからない”に対する応答率が20%未満の項目は648存在し、これらの言葉を次の分析の基礎項目として採用した。

調査 1

目 的

上記の方法によって収集した648語を用いて個人の主観的な感情状態の評定を行なう。この評定値をもとに因子分析を行ない、感情状態の構造を明らかにするとともに、多面的感情状態尺度を作成するための基礎資料とする。

方 法

4年制大学および女子短期大学の心理学関係科目受講者を対象に、講義時間を利用して調査時点での感情状態の評定を求めた。なお、以下の調査も同様の状況下で行なった。一個人がこれらの全ての言葉について評定を行なうのは調査の信頼性を保つ上で問題があると判断したため、奇数番目の項目と偶数番目の項目によって、リストを折半し(各324項目)、各リストは別の被験者群によって評定が行なわれた(以後、リスト1の被験者群をグループ1、リスト2の被験者群をグループ2と呼ぶことにする)。評定は、“はっきり感じている”、“かなり感じている”、“いくらか感じている”、“まったく感じない”の4点尺度で行なった。グループ1の被験者の総数は500名(男子330名・平均18.8歳、女子170名・平均18.9歳)であった。また、グループ2の被験者の総数は754名(男子556名・平均18.6歳、女子198名・平均18.7歳)であった。

折半したリスト(リスト1,2)について、そこに含まれる全ての項目に対する評定結果をもとに因子分析を行なうには、項目(変数)の数が多いため、さらに各リストの項目を折半して162の項目群毎に因子分析を行なった。なお、本研究の因子分析は全てSASの手続きを利用した。

結果および考察

リスト1に関して、分割された2つの項目群の各々を主因子法により因子分析したところ、固有値が1.0以上の因子は各項目群において22個と19個存在したが、いずれにも優勢な2つの因子が見いだされた。一方の項目群の因子分析の結果においては、第1および第2因子の固有値は45.2と19.5であり、この2因子は全分散の53%を説明していた。他方の項目群の結果においては、固有値はそれぞれ51.9と20.5であり、これらの2因子は全分散の57%を説明していた。これらの2因子は従来、Watson & Tellegen (1985)等により肯定的感情、否

定的感情と呼ばれてきたものに該当する。一方、リスト 2 に含まれる項目群に対しても同様の手続きで因子分析を行なったところ、ここにおいても肯定的感情と否定的感情の 2 つの因子が見いだされ、これらは全分散の 53% と 55% を説明した。肯定的感情と否定的感情に関する 2 因子は Watson & Tellegen (1985) の結果に従えば直交することが仮定されるので、主因子解に続いて Varimax 回転を行なったところ、リスト 1 の項目は 1 つの項目を除き、またリスト 2 に含まれる項目は 2 つの項目を除き、これらの 2 つの因子のいずれかまたは両方に 0.30 以上の負荷を示した。我々は多様な感情状態を大きく肯定的感情と否定的感情に分類し、その後に各々の下位構造を探索することにした。そこで、各リスト毎に、これらの項目を 0.30 以上の基準により、肯定的感情項目(リスト 1 では 161 項目、リスト 2 では 155 項目)と否定的感情項目(リスト 1 では 210 項目、リスト 2 では 209 項目)に再分類し、それぞれをさらに Promax 法により因子分析を行ない、2 因子の下位構造を明らかにした。

まず、各リストの感情項目群毎に主因子解を行なった。次に、固有値が 2.0 以上の因子に関して Promax 法により斜交回転を行なった。肯定的感情項目群に関しては、リスト 1 とリスト 2 で 6 因子が抽出された。但し、リスト 1 に関しては、第 5 因子以降は弱小な因子で解釈が困難であった。しかし、ここで抽出された主要な因子に関しては、因子の出現順序は異なるが、内容は類似していた。すなわち、覚醒の比較的高い快適な状態、感情の動揺や驚き、相対的に低い覚醒状態を伴った快、愛情に係わる社会的感情に関する 4 因子が各リストにおいて共通に出現している。他方、否定的感情項目群に関しては、リスト 1 では 11 因子が、リスト 2 では 10 因子が抽出された。ここでは、リスト 1 とリスト 2 で内容が類似していると思われる 3 因子が存在し、これらは抑鬱、嫌悪と怒り、疲労や無気力感といった覚醒の低い不快状態に関するものであった。これ以外の因子の内容は、リスト間で異なっており、肯定的感情項目群に比べて、多様な内容を有していた。

調 査 2

目 的

代表的な感情状態因子を同定するために、先の独立に行なわれた 4 つの因子分析の結果に基づき、それぞれの因子に 0.30 以上の負荷量を示した項目から最小で 1 項目、最大で 14 項目を選択し、131 項目からなる新たなリストを作成した。項目の選択に際しては、できるだけ多様な内容の項目を残すために、たとえ弱小な因子であってもそこから最低でも 1 項目は残し、さらに同一の因子に負荷量の高い項目であっても互いに表現内容が類似している項目は除外して行った。本調査の目的はこの新た

に作成された 131 項目からなる感情状態リストの因子パターンを明らかにし、感情状態因子を同定することである。

方 法

被験者は大学生 513 名(男子 261 名・平均 19.0 歳、女子 262 名・平均 19.2 歳)であった。評定の形式は、調査 1 の場合と同様の 4 点尺度を用いた。因子分析は Promax 法を用いて行った。

結果および考察

因子分析の結果、固有値が 1.0 以上の因子は 12 存在した。これらの 12 因子により全分散の 82% が説明された。次に回転後の 12 因子の内容について検討した結果、第 9 因子以降は弱小な因子で解釈が困難であった。そこで 8 因子の内容について概観すると、調査 2 においても調査 1 において見いだされた主要な因子がほぼ安定して出現した。まず、肯定的な感情に関して高覚醒・快の状態が同定された(第 2 因子)。次いで、低覚醒・快の状態も同定された(第 7 因子)。さらに、愛情に関する社会的感情因子が見いだされた(第 6 因子)。これらはいずれも調査 1 における 2 つの因子分析の結果から得られたものとよく類似していた。他方、否定的な感情状態に関連したものでは、抑鬱・不安感情に関するものがみられた(第 1 因子)。2 番目は低覚醒の不快状態に関するもので、調査 1 では疲労感や無気力感に関する因子として現れていたものに相当する(第 4 因子)。3 番目は怒り、敵意といった攻撃的感情に関するものである(第 5 因子)。これらの 3 因子は調査 1 においても出現したもので、比較的安定した因子であろうと思われる。これ以外にも比較的中性的な感情因子が認められた。驚きに関連した因子で、調査 1 においては肯定的感情項目と否定的感情項目の因子分析の両方において出現した因子(第 3 因子)や目覚めた注意深い状態(第 8 因子)に関するものである。

このように本研究においては主要な 8 因子が認められたが、これらはいずれも単極性の因子であった。研究者によっては少数ではあるが、正反対の意味内容を両極に有する双極性の因子を報告している例も存在しているので、この点については調査 3 で検討した。

調 査 3

目 的

調査 2 において見いだされた因子は全て単極性の因子であった。その原因の 1 つとして反応形式の問題が考えられる。調査 2 においては、“まったく感じていない”、“いくらか感じている”、“かなり感じている”、“はっきり感じている”の 4 点尺度を用いた。このような反応形式を用いると、“まったく感じていない”の方に反応は偏る傾向が認められた。このような反応の偏りが単極性の因子を生み出す原因になっていることが指摘されて

いる (Russell, 1979)。そこで、この調査においては、“まったく感じていない”、“あまり感じていない”、“すこし感じている”、“はっきり感じている”という反応形式を用いることにより、反応の偏りを是正することにした。

方法

被験者は、大学生 453 名 (男子 277 名・平均 18.4 歳、女子 176 名・平均 18.2 歳) であった。因子分析には Promax 法を用いた。

結果および考察

この調査では、反応形式を変更した。その結果、調査 2 の場合と比較して次のような応答分布の変化が認められた。調査 2 においては、“まったく感じていない”、“いくらか感じている”、“かなり感じている”、“はっきり感じている”に対する応答の比率は、全項目を込みにして、それぞれ 0.57, 0.29, 0.11, 0.03 であったのに対して、本調査の場合には、“まったく感じていない”、“あまり感じていない”、“すこし感じている”、“はっきり感じている”に対する応答の比率は、それぞれ 0.45, 0.31, 0.19, 0.05 であり、分布の偏りはわずかではあるが、改善されている。

次に、調査 2 の場合と同様の方法で因子分析を行なったところ、固有値が 1.0 以上の因子は 14 存在した。これらの 14 因子により、全分散の 81% が説明された。この調査においては反応形式を変更した結果、応答分布の偏りがある程度是正されたが、因子分析の結果は、調査 2 と同様に単極性のものであり、ほぼ同様の因子パターンが再現された。唯一の相違は、攻撃的感情と抑鬱・不安感情が分離せず、同一の因子に含まれた点である。このように、反応形式の変更は因子分析の結果に対して重大な影響をおよぼさなかった。

調査 4 (多面的感情状態尺度の作成)

調査 2 と調査 3 の因子分析結果を比較すると、ほぼ類似した因子が抽出されているが、調査 2 でみられた攻撃的感情に関する因子は、調査 3 では独立した因子としては抽出されなかった。そこで、状態尺度を作成する基礎となる項目の候補を適切に決定するために肯定的な感情状態に関わる項目と否定的な感情状態に関わる項目を主因子解と Varimax 回転を用いた因子分析を利用してまず分類し、次にそれぞれの項目群に対して Promax 法による因子分析を行ない、共通した因子が得られるようにこれらの資料を再分析した。その結果、因子の抽出数を探索的に変化させたところ、肯定的感情状態の項目に関しては 4 因子が、また否定的な感情状態の項目に関しては 4 因子が調査 2 と調査 3 の資料に共通に見いだされ、内容も似通っていたため、この結果に従って、尺度を作成することにした。以上のように、異なる 2 つのサ

ンプルにもとづく因子分析の結果は最終的に肯定的感情項目に関しても否定的感情項目に関しても共通の因子パターンを示したが、覚醒や意識の集中に関する因子に負荷を示した項目や驚きや感情の動揺に関連した因子に負荷を示した項目数が少数であったため、これらの因子に関連した項目で、調査 2 や調査 3 で省かれていた項目を調査 1 に含まれていた項目にまでさかのぼって採用し、感情状態尺度作成のための基礎項目に含めることにし、各因子を代表する 87 の項目を決定した。

目的

ここまでの調査を通して感情状態に関する比較的安定した 8 個の因子が得られたので、これらの因子に負荷を示した項目を用いて多面的感情状態尺度を作成することを試みた。さらに、これらの尺度の因子的妥当性と尺度の信頼性について検討した。

方法

被験者は男子大学生 495 名 (平均 19.0 歳) と女子大学生 307 名 (平均 19.0 歳) の計 802 名である。上記の感情状態を表す 87 の項目を無作為な順序に並べ変え、それぞれの項目に対して、現在それらの感情をどの程度感じているかを“全く感じていない”、“あまり感じていない”、“少し感じている”、“はっきり感じている”の 4 点尺度で評定することが求められた。

結果および考察

この評定結果をもとに、男女別に Promax 法による因子分析を行なったところ、先に見いだされた 8 つの因子を再確認することが出来た。この 8 因子により、男子の場合には全分散の 84%、女子の場合には全分散の 79% が説明された。また、各因子に負荷を示した項目は先の因子分析において負荷を示した項目とほぼ一致した。そこで、この結果をもとにして各尺度 10 項目ずつからなる 8 つの感情状態尺度を作成した。Table 1 には各尺度に含まれる項目と男女別の因子負荷量を示した。なお、これら計 80 項目中、主要な因子以外に 0.30 以上の負荷量を示した項目は男子で 17、女子で 16 項目存在したが、他因子への負荷の程度は多くの場合主要な因子への負荷に比べ、相対的に低いものであった。

これらの 8 つの尺度の内、3 つは否定的な感情状態に関する典型的な尺度で、それぞれ、抑鬱・不安、敵意、倦怠尺度と名付けた。また、次の 3 尺度は典型的な肯定的感情状態を表すもので、活動的快、非活動的快、親和尺度と名付けた。そして、残る 2 つの尺度は比較的中性的な感情状態をあらわすもので、集中尺度と驚愕尺度と名付けた。

Table 2 はこれらの各状態尺度得点の平均値、標準偏差と分布の形状の指標として歪度を示した。各状態尺度得点は、個々の項目の粗点 (1—4 点) を単純に合計したものである。故に、得点の範囲は最低で 10 点から最大

Table 1
多面的感情状態尺度項目と因子負荷量

負 荷 量			負 荷 量		
No.	抑鬱・不安		No.	敵意	
71	気がかりな	.70 .73	75	敵意のある	.52 .70
19	引け目を感じている	.66 .48	43	攻撃的な	.48 .62
70	不安な	.65 .71	82	憎らしい	.47 .76
17	悩んでいる	.64 .73	15	挑戦的な	.37 .14
13	自信がない	.62 .67	57	うらんだ	.36 .67
37	くよくよした	.50 .71	61	むっとした	.31 .77
2	悲観した	.50 .39	69	かっとした	.32 .71
79	沈んだ	.41 .60	20	おこった	.27 .67
44	ふさぎこんだ	.38 .51	18	気分を害した	.21 .46
87	物悲しい	.36 .58	30	むしゃくしゃした	.14 .40
No.	倦怠		No.	活動的快	
48	つまらない	.62 .38	7	活気のある	.75 .85
64	不機嫌な	.59 .08	10	元気いっぱい	.74 .80
42	ばかりしい	.58 .23	8	気力に満ちた	.73 .84
54	疲れた	.58 .58	1	はつらつとした	.60 .64
80	退屈な	.55 .34	41	快調な	.52 .36
36	だるい	.40 .58	83	気持ちのよい	.48 .40
26	無気力な	.35 .50	35	快適な	.48 .38
67	ぼんやりした	.21 .59	50	機嫌のよい	.47 .47
11	ぼやぼやした	.07 .53	55	陽気な	.45 .58
3	無関心な	.20 .26	86	さわやかな	.36 .42
No.	非活動的快		No.	親和	
62	のんびりした	.68 .74	77	いとおしい	.84 .69
52	ゆっくりした	.65 .79	51	愛らしい	.81 .60
34	のどかな	.62 .70	47	恋しい	.77 .69
81	おっとりした	.60 .63	60	すてきな	.74 .60
24	のんきな	.58 .63	85	好きな	.69 .67
74	やわらいだ	.58 .53	68	かれんな	.69 .58
49	平静な	.47 .55	46	あこがれた	.65 .64
14	気長な	.47 .36	59	うっとりした	.61 .58
4	ゆったりした	.46 .55	32	かわいらしい	.54 .47
31	ゆるんだ	.37 .37	45	情け深い	.33 .38
No.	集中		No.	驚愕	
53	慎重な	.75 .72	29	びっくりした	.83 .46
58	ていねいな	.58 .64	5	びっくりとした	.77 .46
27	丁重な	.52 .58	38	驚いた	.66 .49
21	思慮深い	.50 .54	6	動揺した	.58 .37
76	用心深い	.49 .46	16	はっとした	.55 .46
65	懸命な	.43 .38	12	ぞくぞくした	.50 .26
9	注意深い	.43 .57	56	おろおろした	.47 .39
39	真剣な	.33 .47	84	どきどきした	.44 .28
25	鋭敏な	.27 .46	40	うろたえた	.43 .36
66	緊張した	.31 .31	22	ぼうぜんとした	.38 .35

Table 2
多面的感情状態尺度得点の平均値、標準偏差値と歪度

尺度	男			女		
	平均	標準偏差	歪度	平均	標準偏差	歪度
抑鬱・不安	21.6	6.56	0.22	20.3	7.25	0.53
敵意	18.6	6.40	0.63	15.5	5.41	1.32
倦怠	25.0	5.16	-0.19	22.6	5.42	0.24
活動的快	23.3	6.15	0.35	23.8	6.23	0.38
非活動的快	25.2	5.03	-0.20	26.0	5.45	-0.19
親和	21.2	7.26	0.30	19.9	6.39	0.17
集中	22.7	5.60	0.16	20.8	5.44	0.39
驚愕	18.0	5.87	0.76	16.5	5.09	0.90

注) 各尺度の可能な得点範囲は 10—40 である

で 40 点となる。尺度得点の分布の形状に関しては倦怠、活動的快、非活動的快、集中の各尺度得点の分布は比較的正規型に近い形状を示したが、その他の尺度は得点の低い方向に分布が偏る傾向が認められた。特に、敵意、驚愕の各尺度はこの傾向が著しかった。また、各尺度得点間の相関に関しては、肯定的感情尺度間および否定的感情尺度間には 0.4 前後の正の相関がみられたが、親和尺度を除く肯定的感情尺度と否定的感情尺度は互いに無相関であり、さらに集中尺度と驚愕尺度は肯定的、否定的感情尺度のいくつかと正に相関した。

次に、各状態尺度の信頼性について検討した。状態尺度が持つ性質から、再検査信頼性は馴染まないで、各尺度の内的整合性について検討した。Table 3 には、各尺度毎に α 係数を示した。 α 係数は、男子の場合、0.78 から 0.91 の範囲にあり、また女子の場合には、0.83 から 0.92 の範囲にあり、いずれの尺度も高い内的整合性を有している。

以上の結果から、今回作成した感情状態尺度は、因子の妥当性を有していることが確認され、また十分に高い信頼性を有していることが示された。

最後に、欧米においては、これまでに多くの感情状態尺度が作られてきたが、本研究において作成した感情状態尺度との関係について考察する。比較検討した欧米の感情状態尺度は、今回の分析の基礎資料として用いた尺度の中から選択し、出来るだけ広範囲な感情状態を含んでいる Borgatta (1961), McNaire & Lorr (1964), Lebo (1978) を取り上げた。我々が英語の形容詞を翻訳するさいに使用した複数の日本語の候補をもとにして比較検討を行なうことにし、それらの中に見られる尺度項目の一致に注目した。

ここでは、紙面の都合で Lebo (1978) と比較した結果を示すに止める。Lebo (1978) は 5 名の妊婦に対して

Table 3
多面的感情状態尺度の信頼性係数

尺度	α 係数		全体
	男	女	
抑鬱・不安	0.89	0.92	0.90
敵意	0.89	0.89	0.90
倦怠	0.78	0.83	0.81
活動的快	0.90	0.91	0.90
非活動的快	0.81	0.86	0.83
親和	0.91	0.89	0.91
集中	0.84	0.85	0.85
驚愕	0.87	0.84	0.87

Table 4
多面的感情状態尺度項目と Lebo (1978) の各因子を代表する項目との一致数

尺度	Lebo の因子							
	anx	con	dep	en	fa	host-ag	soc-af	wb
抑鬱・不安	2		4					
敵意			1			2		
倦怠			1		4	1		
活動的快		1		5				2
非活動的快								3
親和							2	1
集中	2	3		1				
驚愕	4							

Note. anx=anxiety (11 items), con=concentration (5 items), dep=depression (13 items), en=energy (9 items), fa=fatigue (6 items), host-ag=hostility-aggression (6 items), soc-af=social affection (5 items), wb=well being (13 items).

120 日間にわたって感情状態の変化を記録し、その結果を個人ごとに因子分析したところ、個人を超えて比較的一貫した 8 つの因子を見いだした。Table 4 は、今回我々が作成した 8 つの感情状態尺度毎に、そこに含まれている項目と Lebo (1978) が見いだした各因子を代表する項目との一致数を調べたものである。concentration, depression, energy, fatigue, hostility-aggression, social-affection, well being の各々は、集中、抑鬱・不安、活動的快、倦怠、敵意、親和、非活動的快と対応がみられる。唯一の例外は anxiety に関するもので、我々の尺度の中には anxiety にそのまま対応するものは見られず、抑鬱・不安、驚愕、集中にまたがって一致する項目が認められた。同様の事実は、Borgatta (1961) や McNaire & Lorr (1964) との比較においても見いだせた。例えば、

Lebo (1978) の anxiety に該当する Borgatta (1961) の lonely や McNaire & Lorr (1964) の tension は我々の驚愕尺度と抑鬱・不安尺度の項目に対応が見いだされた。

以上の比較から、我々が見いだした8つの感情状態因子は欧米の研究者たちが見いだした感情因子と比較的によく類似することが明らかになった。しかし、Borgatta の lonely, McNaire & Lorr の tension や Lebo の anxiety, すなわち従来より一般に不安と呼ばれてきたものに該当するものが、今回の我々の研究ではみられなかった点が大きな相違点であろう。このことより、欧米において anxiety と呼ばれてきた感情経験と日本人が不安と名付けてきた感情経験がかならずしも同じものではないことが推察される。同様の事実は、Imada (1989) によっても指摘されている。

既存の多面的感情状態尺度は、種々の薬物の効果や心理療法の効果の判定、芸術作品が感情におよぼす影響というように広範囲の事象に関する研究に応用されてきた (Howarth & Schokman-Gates, 1981)。今後、作成した多面的感情状態尺度に関する妥当性を検討する上でも、このような応用研究が望まれる。

引用文献

- Borgatta, E. F. 1961 Mood, personality, and interaction. *Journal of General Psychology*, **64**, 105-137.
- Gotlib, I. H., & Meyer, J. P. 1986 Factor analysis of the Multiple Affect Adjective Check List: A separation of positive and negative affect. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 1161-1165.
- Howarth, E., & Schokman-Gates, K. 1981 Self-report multiple mood instruments. *British Journal of Psychology*, **72**, 421-441.
- Imada, H. 1989 Cross-language comparisons of emotional terms with special reference to the concept of anxiety. *Japanese Psychological Research*, **31**, 10-19.
- 国立国語研究所 1984 分類語彙表 秀英出版.
- Lebo, M. A. 1978 Intraindividual differences dimensions of mood change during pregnancy identified in five P-technique factor analysis. *Journal of Research in Personality*, **12**, 205-224.
- Lorr, M., & Shea, T. M. 1979 Are mood states bipolar? *Journal of Personality Assessment*, **43**, 469-472.
- McNaire, D. M., & Lorr, M. 1964 An analysis of mood in neurotics. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **69**, 620-627.
- Nowlis, V. 1965 Research with the Mood Adjective Check List. In S. S. Tomkins & C. E. Izard (Eds.), *Affect, cognition, and personality*. New York: Springer. Pp. 352-389.
- Nowlis, V., & Nowlis, H. H. 1956 The description and analysis of mood. *Annals of the New York Academy of Sciences*, **65**, 345-355.
- Russell, J. A. 1979 Affective space is bipolar. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 345-356.
- Thayer, R. E. 1986 Activation-Deactivation Adjective Check List: Current review and structural analysis. *Psychological Reports*, **58**, 607-614.
- Watson, D., & Tellegen, A. 1985 Toward a consensual structure of mood. *Psychological Bulletin*, **98**, 219-235.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1984 Cross-cultural convergence in the structure of mood: A Japanese replication and comparison with U.S. findings. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**, 127-144.
- Watson, D., Clark, L. A., & Tellegen, A. 1988 Development and validation of brief measures of positive and negative affect: The PANAS scales. *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 1063-1070.
- Zuckerman, M., Lubin, B., & Rinck, C. M. 1983 Construction of new scales for the Multiple Affect Adjective Check List. *Journal of Behavioral Assessment*, **5**, 119-129.

—1990. 10. 22. 受稿, 1991. 7. 13. 受理—